平成28年度　各種調査結果を活用した学力保障の取組

事務所名	宮古教育事務所	学校名	宮古市立山口小学校	TEL	0193 － 62 － 2723

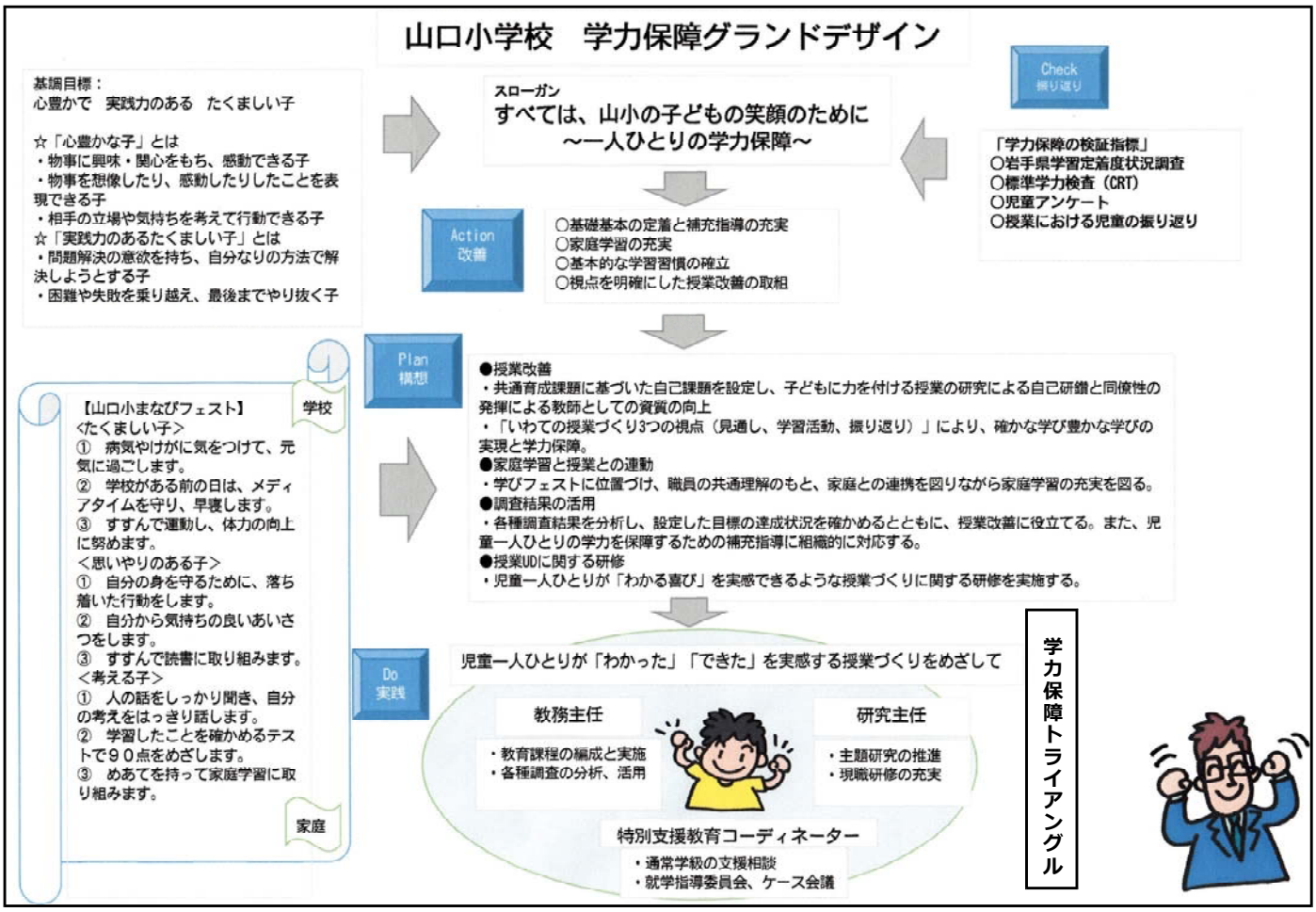
『チーム山口で取り組む一人ひとりの学力保障』
～すべては，山小の子どもの笑顔のために～

【今年度の目標】

ア　岩手県学習定着度状況調査の児童生徒質問紙にある以下の設問を全学年で実施し，
　①「普段の授業で，はじめに授業の目標（めあて・ねらい）を確認していると思いますか」
　②「普段の授業で，最後に学習する内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか」
　　について，「１　そう思う」の回答を 70%以上得る。
　③「授業の内容がよく分かりますか」（国語，社会，算数，理科の４教科）
　　について，「１　よく分かる」の回答を 60%以上得る。
イ　標準学力検査において，個々の伸びに着目して経年変化を見たときに，正方向の変化率を，国語では 60%以上，算数では 50%　以上得る。
ウ　算数における領域別正答率の県比・全国比が 100%未満の領域を減少させる。
エ　岩手県学習定着度状況調査や標準学力検査における各教科の無解答率を減少させる。
オ　岩手県学習定着度状況調査における正答率を各教科とも 70 %以上得る。また，標準学力検査における正答率の全国比 100 以上を各教科で得る。

【本校の実践における工夫点】

１ **「学力保障グランドデザイン」**を作成し，検証改善サイクルのビジュアル化を図ったこと
２　教務・研究・特別支援の３つの側面から一人ひとりの学力を保障するための取組を推進したこと
“学力保障トライアングル”



【具体的な取組①　教務の側面から】

１　諸調査結果の分析と活用　“即時分析と共通理解”

（１）前年度の CRT 分析結果をもとに新担任が重点をおいて取り組む内容の該当ページに付箋を貼ったり，ポイントを確かめたりする時間を年度初めに設定した。

（２）全国学調，県学調について，自校採点の結果が思わしくなかった問題について，全教員で解いてみる時間を設定し，誤答分析や回復指導例を検討することにより授業改善に役立てた。

２　基礎基本の定着を図るための補充学習の充実　“補充学習時間の確保と全職員での対応”

（１）清掃後に１０分間の「ドリルタイム」を位置づけ，国語・算数を中心とした基礎基本の定着を図るためのプリント学習等に取り組ませた。

（２）火曜日の６校時（原則月１回程度）を「教育相談の時間」と位置づけ，個別指導等を含めた補充学習の時間にあてた。

（３）１１月を「学力保障強化月間」と位置づけ，通常のドリルタイムに加え，朝学習の時間（１５分間）も「朝のドリルタイム」として設定し，担任外の職員も教室に入って補充指導にあたった。

（４）「朝読書」（月～木曜日，１５分間）を中心とした読書指導に取り組んだ。

３　家庭学習の充実　　“授業と連動，家庭と連携，進んで取り組む家庭学習”

（１）「家庭学習の手引き」を作成し，全職員で共通理解を図るとともに，全校で足並みを揃えた家庭学習の取り組みを推進した。

（２）家庭学習の取り組みを「まなびフェスト」に位置づけ，「家庭学習の手引き」を家庭に周知した。学期ごとに評価（児童・職員・保護者）することにより改善を図った。

（３）長期休業開けにノートコンクールを行い，互いのノートを交流するとともに，優秀ノートを参観日に合わせて職員室前に掲示し，保護者の方や地域の方にもみていただいた。

宮古市立山口小学校

ひとべん（一人勉強）レストラン　メニュー表
【４年生以上用】

取り組み方法

①「ひとべん」とは、先生から出される宿題以外の家庭学習のことです。つまり、自分から進んで力をつけたいという思いをもって取り組むものです。
②ノートの上の余白に「日にち」「学習した時刻」「メニュー名」を書きます。
例）８月30日（金）　午後5:30～6:30　漢字スキルどんぶり
③1メニューで1ページまたは2ページ使い、見開き2ページぴったりうめます。
④メニューに取り組んだ後にノートがあまったときは、苦手な漢字練習や日記などに取り組み、すきまのないようにします。
⑤このメニュー表は、ノートの表（おもて）ぴょうしにはります。新しいノートになってもはります。
⑥昨年度同様、始めに「課題」、終わりに「まとめ」「振り返り」を書きます。

メニュー表

①漢字スキルどんぶり
漢字スキルを使って、丁寧（ていねい）に漢字練習をします。ただたくさん書くだけでは力がつきません。読みがな、画数、書き順や、その漢字を使った言葉も書きます。

②計算ドリルどんぶり
計算ドリル、アイテムを使って、今までに習った復習をします。丸つけもして、まちがいは必ず直します。

③熟語（じゅくご）調べんとう
勉強しているとき（学校、家庭）、読書をしているとき、意味のわからない言葉が出てきたとき、国語辞典を使って意味調べをします。

④お知らせ日記んぴらごぼう
その日の出来事、土日の様子などを日記にします。様子だけでなく、そのときの気持ちも書くようにします。

⑤視写（ししゃ）ものからあげ
国語、算数、理科、社会の教科書を丁寧（ていねい）に写します。理科は実験の図、社会はグラフや表も書くと、文章とつながって、よりわかりやすくなりますね。

⑥新出漢字ュース作文
新出漢字を使った文を考えます。
例）「学校」「友達」を習ったときは
『学校に行ったら、ぼくの友達の太郎君がサッカーにさそってくれた。』

⑦ローマ字覚えたいやき
五十音だけでなく「だぢづでど」や「きゃ　きゅ　きょ」などの文字も書けるようにして、パソコンのローマ字入力にいかします。

⑧漢字熟語（じゅくご）しりとりんご
漢字のしりとりをノートに書いていきます。
例）学校→校内→内部→部分→分身→身長→・・・

⑨算数説明名人ギスカン
計算手順、文章問題のとき方など、学校で習ったことを「文章」「図」「絵」「式」を使いながら説明します。

⑩読書感想メン
読んだ本の感想を書きます。「登場人物の気持ちの変化」「いちばん心に残った場面の様子とその理由」「読む前と後の気持ちの変化」「筆者（ひっしゃ）の伝えたいこと（要旨（ようし））」など。

⑪まちがい直しチュー
単元テスト、たしかめテストでまちがった問題、いつもまちがう問題をノートに書き、もう１度とき直します。

⑫四字熟語（じゅくご）＆ことわざるそば
国語辞典、四字熟語辞典（よじじゅくご）、ことわざ辞典（じてん）、インターネットを使って、四字熟語やことわざの意味調べをします。

⑬なるほど歴史―チキンサラダ
歴史上の人物、事件、出来事を、教科書や資料集などを使って調べ、ノートにまとめます。

⑭理科実験まとめ玉焼き
実験装置、実験の目的、実験方法、実験結果、考察をノートにまとめ直します。

⑮先取り予習クリーム
次の単元の内容を知っておくことで、授業のときいつも以上に理解することができます。国語は本文視写（しゃ）や新出漢字練習、算数は練習問題を解いてみる、理科・社会は太字の用語の意味や歴史人物の説明など。

⑯時事ニュースープ
日本・世界で起きた事件や出来事、驚きのニュース、知って得する情報など、テレビや新聞で見聞きしたことを、スピーチ原稿のように短くまとめ、最後に感想も入れます。

児童に配布した一人勉強メニュー表（4年生以上用）

【具体的な取組②　研究の側面から】

1　基本的な学習習慣の確立
“山小スタンダードで，どの先生も同じ授業を！”
“学校は学習するところ！”

（１）新年度第１回の校内研で，板書の仕方や振り返りの行い方，文房具のきまり等をまとめた「山小スタンダード」の確認を行った。また，同じ内容について家庭向け文書を配布し，家庭への啓蒙を図った。

（２）全国学調の質問紙結果分析を受け，１１月には，学習成果のさらなる向上を目指すため，各学級において学習規律の徹底を図る取り組みを行った。

取り組む項目に○	取り組み内容	達成状況 全員達成◎ ８割達成○ ８割未満△
	学習内容と関係のない話は絶対させない。また周囲は私語に絶対に付き合わない。	
	話し手（指導者・児童）が話しているときは、手作業をやめ話し手に注目させる。ただし、聞きながらメモを取るようなときはこの限りではない。	
	授業中に間違ってしまった考えや解答は、消しゴムで消さずに青ペンで修正させる。消して直したノートを振り返っても、次につながるノートにはならない。同じ過ちを繰り返さないためである。	
	小テスト・単元テストの間違いは、正しい答えだけを青ペン等でテスト用紙に書くのではなく、「なぜそのような間違いをしたのか」原因も書き残させる。図やグラフがある問題はそれも書く、または切って貼る。４年生以上はその日のうちにがんばりノートに取り組ませる習慣を付けさせる。	
	「～を書きましょう。」と指示されたら、「即座に書かせる」「必ず書かせる」。書く内容を聞いていればすぐに取り組めるはず。いつまでも空欄のままにさせない。	

学習規律チェック表

文房具	ア　鉛筆（５本必ず削ってくる）・消しゴム・ノート・下敷き・筆入れ・定規について、キャラクターがついたものは禁止。キーホルダー等を筆入れやランドセルに付けてくるのも禁止。 イ　赤・青ペンは、ノック式は禁止。その他の色ペンは不要。シャープペンシルも禁止。 ウ　三角定規・分度器・定規は、透明なもの。三角定規・分度器・コンパスは、全員が共通のものを使用する。（使い始めは揃える） エ　蛍光ペンは学年に応じて、使用目的を児童に理解させて使用する。 オ　付箋やメモ用紙は、各学年で用意し、学習時のみ使用する。 カ　持ち物すべてに記名する。
板書 黒板	ア　課題の囲みは赤色、まとめの囲みは黄色とする。 イ　課題とまとめは、必ず教師用定規を使って引く。 ウ　中間まとめや注目ポイント等は、赤色や黄色を使い、青色は視覚上見づらいため極力使わない。 エ　黒板の両脇には、お知らせや名簿等の紙をはらない。黒板は教師のノートであるため、子ども達と同じまっさらな状態で授業を始める。時間割やお知らせ等は掲示板を活用する。 オ　授業展開を明確にするための「㊗」「㊐」「㊖」「㊏」マグネットを活用する。
ノート	ア　見開きのノートの初めの余白に「日付」「曜日」「学習回数（国語は「第○回」、他は「NO.○」を書く。 イ　算数・理科・社会は、ノートの左側１列に線を引き、「㊗」「㊐」「㊖」「㊏」などを書くスペースとする。 ウ　自分と他との考えを区別し、指導者側が児童の変容を見取るために、学び合い（ペア、グループ、全体）での気づきや新たな発見は、「青ペン」で書き加える。 エ　課題の囲みは赤色、まとめの囲みは青色とする。 オ　消しゴムは、字の間違い以外は極力使わない。自分の考えは消さない。 カ　板書を写すときは、指導者とほぼ同時に書き進める。
振り返り 自己評価 トライアングル 	ア　学習の振り返りは、学んだことを具体的に書く。 ・「楽しかったです。」「おもしろかったです。」は書かない。 ・課題が「小数のかけ算の方法を考えよう。」に対して、振り返りが「今日は、小数のかけ算の筆算の仕方が分かりました。」は意味がない。方法の内容を再構築させる場であることから、具体的にその方法を書く。 ・「○○さんの考えを聞いて理解できました。」も不十分。○○さんのどんな考え方が自分にとって意味があったのかを書くことで、○○さんの考え方が自分のものになる。 イ　国語と算数の見開き終わりには、「自己評価トライアングル」をはり、学年で決めた観点の自己評価をする。三観点は教室に掲示する。
家庭学習 がんばりノート	ア　宿題を忘れたりやり残しがあったりしたときは、その日のうちに休み時間等を使ってやり遂げる。 イ　「家庭学習の手引き」に基づいた家庭学習を心がける。 ウ　がんばりノートは、日付・学習の初めと終わりの時刻・課題・振り返りを書く。 エ　「ひと勉レストラン」のメニューは、学年に応じて取り組みやすいものに随時変えていく。 オ　３年生以上は、１つの学期中にひと勉レストランの全メニューに取り組む。 カ　３年生以上は、見開き２ページを節間なく書くことを基本とする。
その他	ア　授業終わりのあいさつ後、すぐに次の授業の用具を準備してから、休憩を取る。「準備」とは、ノートに下敷きを敷き日付等を書いたり教科書を開いたりしておくこと。 イ　「ハンドサイン」（グー＝同じ、チョキ＝付けたし、パー＝自分の考え・他に）や「声のものさし」（１＝隣、２＝グループ、３＝教室内、４＝体育館、５＝校庭）を意識して授業に参加する。

山小スタンダード（指導者用）

2　「いわての授業づくり３つの視点」に基づく授業改善の取り組み　“身に付けさせたい力と具体の手立て”

「いわての授業づくり３つの視点」を全職員で確認するとともに，「学習の見通し」「学習課題(学習問題)を解決するための学習活動」「学習の振り返り」の各視点における児童に身に付けさせたい力と具体の手立てを国語・算数の各部会において検討し，本校における指導の手立てとして具体化することにより，授業改善に役立てた。

「いわての授業づくり３つの視点」本校の“実践研究の柱”と連動		児童に身に付けさせたい力	具体の手立て
学習の見通し	ア　学習のゴールを見通す →学習課題解決の必然性を抱かせる。（なぜこれを考える必要があるのか、何のために解くのか） イ　学習内容を見通す →既習事項を駆使して考えさせる。（どの既習事項が使えるか、またさらに新たなものを導き出せるか） ウ　学習プロセス（過程）を見通す →解決するための「学習の仕方」を理解させる。（筆者の疑問を解決するための読み、図を使って解く、個人か集団か、など）	国語 ☆単元のゴールや単位時間のゴールを見通して学ぶ力 ☆既習を生かし、意欲的に学ぶ力	（１）児童が、学習の内容、解決の手順・方法、学習のゴールを見通せる授業づくりをする。 （２）何ができたら『学習のゴール』（児童が「わかった」「できた」と認識できる）かを、明確にした授業づくりをする。 （３）単元を通して身に付けさせるべき学習内容や言語技術を明確にした授業計画を立てる。 （４）既習を生かすことができるように、学びのつながりを大切に扱う。
		算数 ☆前時との類似点・相違点に気付く力 ☆「～や～を使いたい。」と意欲をもって解決しようとする力 ☆既習との関わりに気付く力	（１）既習内容を掲示し、本時とのつながりを意識させる。「昨日のことを使えば今日の問題は解けそうだ。」と感じさせる。 （２）日常生活の中で、算数の技を使って解く問題を提示し、課題（問題）に主体的に関わらせる。 （３）適用問題を見て、「これを解くために今日は○○を身に付けなければならない」と目標を掲げさせる。（学習のゴールを具体的に示す）

「いわての授業づくり３つの視点」と「本校の実践研究の柱」との連動　『学習の見通し編』

3　主題研究の取り組み　“児童一人ひとりが「わかった」「できた」を実感する授業づくりをめざして”

（１）主題研究のテーマを「“児童一人ひとりが「わかった」「できた」を実感する授業づくりをめざして　～共通育成課題と自己課題に基づく国語科，算数科の授業改善を通して～”とし，全職員が自己課題を設定して，AR（アクションリサーチ）による授業改善に取り組んだ。

（２）授業研究会の実施においては，学力保障の観点に基づいた以下の手立てを講じ，全職員で児童が「わかった」「できた」を実感できる授業だったか，一人ひとりの学びを保障していたかを振り返ることができるよう工夫を行った。

＜学力保障の観点からの工夫点＞

① 指導案前段の「指導観」の項に前年諸調査結果を受けた児童の実態を明記し，授業構想のベースとして指導者に意識付けるようにしたこと。

② 「わかった」「できた」を実感するための取組についての記載欄を設け，学習内容の確実な定着を指導者にさらに強く意識づけたこと。

③ 「本時の指導」の展開欄内に，『「わかった」「できた」が実感できた児童の姿』の記載欄を設け，授業者及び参観者が学習を客観的に振り返ることができるようにしたこと。

④ 諸調査結果や既習事項の定着状況を記した座席表を提示することで，授業者が個別の支援に生かし，参観者が児童の学習状況をより深く見取れるようにしたこと。

⑤ 参観の視点を明示し，授業評価の焦点化，共有化を図ったこと。

⑥ 事後研究会は，バズセッション型研究会の形式で行うことで，より多くの職員が児童を見取ったり，評価したりして，指導改善の手立てを共有し，授業者にフィードバックできるようにしたこと。

＜指導案の具体＞

（3）指導観

① 昨年度の諸調査の結果をふまえた取組について

昨年度のCRTの結果から，本単元に関わる設問の正答率が５０％未満のものは，以下の通

同じ種類のクリップがたくさんあります。クリップの重さを量ったところ，１０個で４ｇ，
クリップ全部の重さが２ｋｇのとき，クリップは全部で何個あると考えられますか。
ア ２５０個 イ ５００個 ウ ８００個 エ ２５００個 オ ５０００個
（通過率 ８％）

ｙがｘに比例するもの，ｙがｘに反比例するものを，以下から選べ。
ア １ｋｇ１００円の食塩を買うときの，買う重さｘｋｇとその代金ｙ円
イ １冊２５０ページの本を読むときの，読んだページ数ｘページと残りのページ数ｙ
ウ １００ｋｍの道のりを自転車で走るときの，走る時速ｘｋｍとかかる時間ｙ時間
エ 周りの長さが２０ｃｍの長方形の，縦の長さｘｃｍと横の長さｙｃｍ
（通過率 比例するもの１７％ 反比

題意に合う比例のグラフを選ぶ問題
（通過率３６％）

本単元における諸調査の問題，分析結果を記載。

展開 15分	4 問題解決を図る。	
	―活動１―	
	（1）どの考え方が，「１枚の重さを調べる方法」なのかを選ぶ。【個】	・選択の根拠も考えさせる。
	（2）理由を話し合い，確かめる。【全体】	・答えの確かめもする。
	―活動１― ◎ 他の２つはどんなやり方か，名前をつける。（～する方法・～という考え方）	
	―活動２―	
	（1）他の２つの考えについて，どんな方法か考え，命名し，命名の理由をノートに書く。【個→グループ】	【考】比例の性質と問題の解決方法を結びつけ，適切に命名することができる。（発言・ノート）
	≪期待される児童のノート・発言≫ ②の図： （名前）「比例を横に見る考え方」「横やじるし方式」 （根拠） １０から３００までは３０倍という考えを使って，７３の３０倍で枚数を求めているからです。 ③の図： （名前）「きまった数を求める方法」「比例を縦に見る考え方」 （根拠） ｙがｘに比例するとき，ｙ＝きまった数×ｘという式が成り立つことを使っているからです。	
	（2）命名の理由を交流し合い，考え方を確かめる。【全体】	・必要に応じて，説明のくり返しや付け足しをさせたり，図や式で表現させたりする。
終末 15分	5 学習内容をまとめる。	
	☆ 画用紙の重さは枚数に比例することを使うと，およそ３００枚を用意できる。	・板書をもとに，□の部分を埋めさせる。
	6 適用問題を解く。	
	同じ種類のくぎ２０本の重さを量ったところ，１６ｇでした。このくぎを全部数えずに，どうすればよいでしょう。	くぎの本数と重さ
	「わかった」「できた」が実感できた児童の姿を展開案の中に具体的に明記。	
	【考】比例の性質を問題の解決に用いることができる。（ノート）	
	7 学習の振り返りを書く。	

適用問題の評価基準（③の考えを例に，児童の言葉で）

充分満足できる	満足できる	遅れ気味の子に
表を縦に見ます。２０と３２から，決まった数は，３２÷２０＝１．６で１．６。だから，５００×１．６＝８００（g）（式と言葉の両方で）	例1 ３２÷２０＝１．６ ５００×１．６＝８００（g） 例2 決まった数を求めて，それを５００とかけます。（式のみ，または言葉のみ）	２つの数量の関係を，数直線で表させる。

バズセッションの様子

学習過程ごとに参観の観点を示し，より客観的な授業評価ができるようにした。

（5）授業参観の視点

学習過程	参観の視点
導入	① 不可能と思える問題により，児童の注意と意欲を引き出している。
展開	② 選択肢を与えることが，全員が授業に参加できる手立てとなっている。 ③ 児童にとって「説明する」ことが，必然的な活動となっている。 ④ 意思表現（立つ・座る）や，任意のグループ活動が，児童の主体的な学びへとつながっている。
終末	⑤ 学習内容が明確で，まとめることに活用できるような板書になっている。
全体	⑥ 児童が本時の目標を達成している。（評価項目） ⑦ 児童にとって「分かる喜び」「できる喜び」を味わった授業になっている。

事後研究会のまとめ

【具体的な取組③　特別支援教育の側面から】

1　特別支援コーディネーターを中心とした学力保障　“学びのセーフティネット”

（１）学級担任が特別支援コーディネーターに随時，気になる児童について相談できる環境をつくり，担任ひとりが指導に悩むことのないようにした。

（２）特別支援コーディネーターが空き時間等を活用して，通常学級の児童の様子を積極的に観察し，一人ひとりの学びの実態を随時把握するようにした。

（３）特別支援教育，生徒指導に関わるケース会議のみならず，学力保障の観点からのケース会議も開催し，指導体制の変更や見直しに随時取り組んだ。

校内就学指導委員会（ケース会議含）の経過

<学力保障関係のみ>

1　第１回校内就学指導委員会（４／１１）
・特別支援学級在籍児童の学習の進め方（交流学級の入り方）等
・通常学級在籍の配慮の必要な児童に対する支援体制の確認
（担任外の指導も含めて）

2　第２回校内就学指導委員会（６／６）
・特別支援学級在籍児童の学習の様子
・通常学級在籍児童の個別指導の様子・成果について
・支援度が高い児童について

3　ケース会議（学力保障の側面から）（８／１８）
・3年男子児童（個別算数指導の実施について）
・5年女子児童（別室登校中の学習支援体制の確認）
⇒　（担任外時間割の見直し）

【成果】

1　今年度，実施した「全国学力学習状況調査（６年）」「岩手県学習定着度状況調査（５年）」の質問紙結果をみると，「目標（めあて・ねらい）の提示」「学習内容の振り返り」については，ほとんどの児童が積極肯定の回答をしている。また，「授業内容がよく分かるか」については，両学年ともこの時点では，本校の目標を上回ることができなかったが，前年度より改善の傾向にある。「まあまあ分かる」の回答を加えると，９０％を超えることから，こちらについても授業改善の成果があると考えている。（下図参照）

平成２８年度　岩手県学習定着度状況調査質問紙調査結果より

質問番号	質問事項　【「そう思う」・「よく分かる」と回答した割合（%）】⇒	本校	県	差
25	普段の授業で、目標（めあて・ねらい）が示されていると思いますか	88.0	63.0	△25.0
26	普段の授業で、最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか	81.0	49.0	△32.0
63	国語の授業の内容はよく分かりますか	50.0	42.0	△ 8.0
35	算数の授業の内容はよく分かりますか	56.0	48.0	△ 8.0
39	社会の授業の内容はよく分かりますか	56.0	46.0	△10.0
43	理科の授業の内容はよく分かりますか	31.0	64.0	▼33.0

平成２８年度　全国学力・学習状況調査質問紙調査結果より

質問番号	質問事項　【「そう思う」・「よく分かる」と回答した割合（%）】⇒	本校	全国	差
53	5年生までに受けた授業の中で、目標（めあて・ねらい）が示されていたと思いますか	81.5	56.9	△24.6
54	5年生までに受けた授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか	63.0	39.9	△23.1
63	国語の授業はよく分かりますか	33.3	36.3	▼ 3.0
73	算数の授業はよく分かりますか	59.3	46.7	△12.7

2　「学力保障グランドデザイン」を作成し，CAPD サイクルの“見える化”を図った。今年度新規に取り組みを始めたことは多くはないが，図示することで，学力保障の取り組みについての共通理解が容易になった。

3　教務主任（ハード面）と研究主任（ソフト面）の連携強化だけでは，対応できない一人ひとりの学力保障を考えた場合，学びのセーフティネットとして特別支援教育の視点からのアプローチは不可欠であり，組織的対応の大きな柱の一つとして，特別支援教育コーディネーターの存在を位置づけることに意義があると感じている。